

東京バッハ合唱団 月報

[第 762 号] 2025 年 12 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp ホームページ <http://bachchor-tokyo.jp> ↑



BACH-CHOR TOKYO

Monthly Newsletter No.762

December 2025

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo Japan

バッハ・カンタータの壁

大村 健二 (団員)

バッハ・カンタータの愛好家が集まる、この機関紙で語るような話題ではないのですが、どうもいつまで経っても、このカンタータという作品群がわが国で一般性をもたないことに、ちょっと寂しさを感じてしまいます。

いや、カンタータを専門に歌う合唱団も数えきれないほど出来て、毎月、国内のどこかでコンサートが開かれるようになったし、60 年前、「バッハ合唱団」と名乗ればうちのことだったころに比べれば、夢のような話ではあります。レコード盤でも CD でも DVD でも複数の「バッハ全集」が揃い、ネット上には Youtube その他、探せば多くの立派な演奏に簡単に出会えるようになっていきます。当合唱団の Youtube チャンネルにも多くの方が登録してくださって、視聴してくださっているようです。

何が不服で満たされないのかと思いついてみれば、何のことはない、「日本語演奏」を団是とする、当「東京バッハ合唱団」の存在感が、いつまでも薄いままなのでした。団員は増えないし、訳詞つき出版譜の在庫はいっこうに減らない。

*

思いつく壁を、いくつか書き並べてみましょう。

- ・当団の演奏のレベルに問題がある。
- ・バッハの音楽自体に魅力がない。
- ・歌うにはむずかし過ぎる。
- ・カンタータの歌詞が日本語なので邪魔だ。
- ・原語でも、歌詞の内容が面白くない。
- ・そもそも、キリスト教文化に興味がない。
- ・合唱音楽そのものがダサい。
- ・ひっくるめて、時代遅れだ。



等々、壁は何重にも張り巡らされているのでした。

*

バッハ・カンタータの壁、略して「バカ」の壁。

元祖「バカの壁」のほうは、自分の理解できるものだけを「正しい」と思いこみ、理解できないものは排除してしまう、といった、われわれ人間のサガみみたいなものを「壁」と見立てていましたが、養老さんに即して言えば、冒頭にあげた「演奏レベル」は別格として、どうも、われわれのほうに課題があることが分かってきます。

バッハ音楽の構造の面白さを自明だと思い込んでいる人種こそが、ちょっと危ない。技法の複雑さは演奏するもの泣かせだ (バッハは当時も、こんな構造や技法を非難された)。聴くほうは、無理して原語を聴きとっている、歌う者も努力するべきだ。それが洋楽というもの。バカは近づくな (昔、さる専門家に「バッハを歌うのは、素人には無理！」と言われました)。プロテスタンティズムの現状は、「ゾンビ状態」はおろか、今や「ゼロ状態」だそうです (E. トッド)。わが国にあっては、その推移も無関係なほど無力でしょう。

要するに、世間のほうが「まとも」なのであって、愛好家は、バカに甘んじるべき、となるのでしょうか。それでも、この機関紙は、バッハ・カンタータの魅力を宣伝し続けて参ります。

「バカの一つ覚え」という“誉め言葉”に励まされつつ。来年もよろしくお願ひいたします。



■上・下とも：さいたま市別所沼公園
(撮影：千葉光雄・団員、2025/11/26)

月報 2025 年 12 月号 CONTENTS

- ・カンタータ第 196 番ご案内、次回公演予告…… p. 2-3
- ・連載：退屈するのはいそがしい [58] (大野博人) p. 4

カンタータ第196番《主は覚えたもう われらを》

Der Herr denket an uns BWV 196

大村 健二 (団員)

◆次回定演 (右掲予告)、残りの1曲

バッハのカンタータ作品のなかでも、とくに緊張感のみなざる2曲をご案内しました (BWV 20: 月報9月号、BWV 10: 10月号)。今回は残りの1曲、BWV 196を取りあげます。

バッハの親しい牧師と身内の女性との結婚式に際しての祝賀曲とされており、親密で活発な軽快さにあふれた、バッハ初期カンタータの1曲です。

今回は歌詞が短いので、全文を掲げておきます (原詞: ルター訳「詩編」115篇 12-15節。大村恵美子訳詞、「バッハ・カンタータ 50曲線 No. 49」2002年刊より引用)。

1. シンフォニア(序曲)

2. 合唱

主は 覚えたもう われらを
賞(め)でたもう イスラエルを
めでたもう アロンを (詩編 115篇 12節)

3. アリア (ソプラノ)

主 めでたもう その民を
小さきも 大いなるも (詩編 115篇 13節)

4. 二重唱 (テノール・バス)

主は なれを めでたまわん
日ごとに
なれらと その子らをも (詩編 115篇 14節)

5. 合唱

主に めでられしもの
天(あめ)と 地(つち)の 主なる神に
アーメン (詩編 115篇 15節)

この部分 (12-15節) は、イスラエルの民に対する神の祝福の確信を歌ったもの。主はイスラエルを覚え、民と祭司と、主を恐れるものすべての子孫の繁栄を約束し、祝福を与えてくださる、と宣言しています。

訳詞は、原詞にほぼ忠実ですが、第3曲の下線の〈その〉には、「主を畏れる」(115, 13前半)の意を盛り込みたかったところですが、音節数の不足により縮約せざるを得なかった一例です。また、終曲の〈アーメン〉は、詩編にはなく、バッハによる付加です (原詞との対訳は、当ページの脚部を参照)。

◆〈アロン〉って、だれ?

音楽は、ハ長調の明快なシンフォニアで開幕します。新郎新婦が、こころ弾む付点リズムにのって登場すると、会場のあちこちから、〈主は 覚えたもう〉の祝福の声が上がり、各声部のフーガへと発展します (第2曲合唱)。やがて、主題旋律が変化して〈めでたもうイ

次回定期公演 (2026年) 予告

第124回定期演奏会

— J. S. バッハ日本語演奏 大村恵美子訳詞 —

・カンタータ第10番《わが魂 主をあがめ》

Meine Seel erhebt den Herren BWV 10

・カンタータ第196番《主は覚えたもう われらを》

Der Herr denket an uns BWV 196

・カンタータ第20番《雷の言葉 おお なんじ永遠よ》

O Ewigkeit, du Donnerwort BWV 20

—2回公演—

◇荻窪公演

[日時] 2026年5月30日 (土) 14:00 開演

[会場] 日本キリスト教団 荻窪教会

(杉並区荻窪4-2-10、JR中央線荻窪駅下車)

◇三崎町公演

[日時] 2026年6月6日 (土) 14:00 開演

[会場] 日本キリスト教団 三崎町教会

(千代田区神田三崎町1-3-9、JR水道橋駅下車)

—両会場共通—

[演奏]

・指揮: 山本悠尋 (やまもと・ゆきひろ)

・独唱 ソプラノ: 藤原優花、アルト: 中島麻紀子

テノール: 野中裕太、バス: 藤田魁人

・管弦楽: ARS(コレギウム・アルモニオ・スペリオール・ジャパン)

・オルガン: 田尻明葉

・合唱: 東京バッハ合唱団

[参加] 入場無料 (申込み不要)

[主催] 東京バッハ合唱団

スラエルを、めでたもうアロンを)と歌い上げますが、〈アロン〉って何? 誰でしょうか?

旧約聖書に登場する重要な人物、モーセの兄で、イスラエル民族の宗教的指導者の一人、初代の大祭司、なのだそうです。キリスト教の歴史のなかでは、長く祭司職の原型とされてきました。

本日の結婚式の主役の花婿こそは、バッハがその前年に、最初の妻、マリーア・バルバラと結婚したときに司式をしたアルンシュタットの牧師、シュタウバー師その人だったのではないかとバッハ伝のシュピッタが推論しています。ちなみに、この日のもう一人の主役、花嫁はマリーア・バルバラの伯母でした。この式を包む空気の、格別な親密さが想像されます。

プロテスタントの世界では、上記の祭司職は広く「牧師」に相当します (カトリックでは「司祭」、正教会では「神父」)。ということは、〈アロン〉は、まさにシュタウバー牧師への、直接の呼びかけだったことが分かり、われわれも納得して歌い、聞くこととなります。歌詞を探してきた人物は知られていませんが、ほぼ間違いなく、作曲家バッハだと思われまます。

こんな事情を背景にして、お聴きいただければ、より親しみが増すのではないのでしょうか。

◆結婚式の礼拝は、どの教会で？

BWV 196 は、シュタウバー牧師とマリーア・バルバラの伯母との結婚式の際に上演された、と仮定して、では、式場となった教会はどこだった可能性が一番強いでしょう、と ChatGPT に訊いてみました。「とても良い質問です」と始まり、当時バッハがオルガニストとして勤めていたミュールハウゼン聖ブラジウス教会（右掲・上）を再有力候補として挙げました。人物の関係性、地理的条件、演奏環境などから、と。

さて、この連載の主眼として、曲と向かい合う際に何か視覚的なヒントを添えてみようと思図した経緯があります。何らかの聖書物語が主題になっていれば、その場面を描いた聖画や図像があるはずで、筆者の好みで紹介してきました。BWV 20 では中世の装飾写本、BWV 10 では15世紀フランドル画家、といった具合。ところが、この作品は、作曲者に身近な二人の婚礼祝賀が目的ではなからうかという。旧約の人物アロンの名が登場するが、出エジプトの物語ではない。すなわち、この場面を説明する画像はないのです。では、せめて式の会場となった教会のイメージでも掲げてみよう、と ChatGPT の知恵をお借りしたわけです。

このカンタータの曲の素朴な印象などからすると、筆者のイメージでは、その前年に行われたバッハ自身とマリーア・バルバラとの結婚式(本日の主演シュタウバー牧師が司式)の舞台となったアルンシュタット近郊ドルンハイムの聖バルトロメオ教会(右掲・下)に近かったのですが、チャッピー(ChatGPT)の答えは、ミュールハウゼン・ブラジウス教会でした(彼はシレっと嘘をつくことが多いです。気をつけましょう)。

BWV 196 の初演についての詳細は、すでに決着済みなのかもしれません。ご教示いただければ幸いです。

■上：ミュールハウゼン聖ブラジウス教会
Kirche divi blasii mühlhausen
/Google
(ChatGPT が推測した BWV 196 の舞台、バッハが1707年7月から8年6月までオルガニストの職にあった)



■下：ドルンハイム聖バルトロメオ教会(アルンシュタット近郊)
[https://de.wikipedia.org/wiki/St._Bartholom%C3%A4i_\(Dornheim\)](https://de.wikipedia.org/wiki/St._Bartholom%C3%A4i_(Dornheim))
(バッハが1707年10月、シュタウバー牧師の司式により、マリーア・バルバラと挙式)



※アルンシュタットは、ミュールハウゼンから、南東に直線距離で50キロほど。ここドルンハイムはその小村。何回目かのドイツ演奏旅行の際に訪ねたところで、石造の素朴な礼拝堂だったと記憶しています。

BWV 196 関連年譜

- <アルンシュタット時代> (1703-1706)
 - 1703/08、アルンシュタット「新教会」(今日は「バッハ教会」)のオルガニスト就任(19歳)
 - 1705/10頃、リューベック旅行(ブクステフーデの大曲を聴く、期限に戻らず)
 - 1706/11、聖職会議より叱責を受ける
- <ミュールハウゼン時代> (1707-1708)
 - 1707/07-1708/06、バッハ、聖ブラジウス教会(写真・上)のオルガニスト在職
 - 1707/10/17、ドルンハイム(写真・下)にて、バッハとマリーア・バルバラの結婚式(シュタウバー牧師の司式)
 - 1708/06/05、上記シュタウバー師とマリーア・バルバラの伯母との結婚式(BWV 196 初演か?)、初演の舞台は？

カンタータ第196番《主は覚えたもう われらを》
Der Herr denket an uns BWV 196

[用途] 結婚式(?)
[成立・初演] 1708年6月5日?、ミュールハウゼン(バッハ自身の式を司式した牧師と身内との結婚式か)
[歌詞] 詩篇 115、12-15(ルター訳)
[編成] 独唱 STB、合唱、弦合奏、通奏低音
[楽曲構成]

楽章	冒頭句	原詞/訳詞	編成/調
1. シンフォニア	(器楽のみ)		str, bc ハ長調、4/4
2. 合唱	Der Herr denket an uns und segnet uns	主は覚えたもう われらを	str, bc ハ長調、4/4
3. アリア (S)	Er segnet, die den Herrn fürchten	主 章(め)でたもう その民を	Vn2, bc イ短調、4/4
4. 二重唱 (T/B)	Der Herr segne euch	主は なれをめでたまわん	str, bc ハ長調、3/2
5. 合唱	Ihr seid die Gsegneten des Herrn	主に めでられしもの	str, bc へ長 →ハ長、4/4

[演奏時間] 約13分

[上演用訳詞] 大村恵美子 <http://ss964897.stars.ne.jp/bwv196.htm>
[上演履歴] 1969(#17)、1979(#45)、2026(#124) 予定

<東京バッハ合唱団、団員募集>

あなたも、日本語でバッハを歌ってみませんか？
経験は問いません。資格は、唯一「バッハが好き！」
新年は、2026年1月10日(土)開始、次回公演の曲目です。

◇練習日/会場
毎週土曜日、15:30 - 17:30、荻窪教会(日本キリスト教団)
(JR/地下鉄「荻窪」駅・南口から徒歩8分)
(〒167-0051 杉並区荻窪4-2-10、HPに地図あり)

◇費用 団費：5000円(月額)
◇見学歓迎
・参加/見学は、事前にご一報のうえ、お気軽にお越しください。(メール: office@bachchor-tokyo.jp)
・詳細は、ホームページをご覧ください(下記)。
<http://bachchor-tokyo.jp/>
・楽譜(当団出版局刊)は練習会場で販売。事務局にお申し込みいただければ、お送りします。

◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm

<連載随想>

退屈するのはいそがしい [58]

健康



安曇野閑人 大野 博人

安曇野に引っ越してから近所のジムに通っている。その壁に大きく格言が掲げられている。

「真のトレーニングは、やめたいと思ったときから始まる」

なるほど。ということは、私はジムに来た初日から「真のトレーニング」をしているんだ。12もあるマシンを順々に試して四苦八苦しなながら「こんなこと続けるのはごめんだな」とすぐに思ったのだから。にもかかわらず、ずるずると5年も続けてしまったのは意志が弱いからだ。意志が弱いと、真のトレーニングが続けられる。

さて、格言は、米国の伝説のボディービルダーの言葉だという。国際的な大会で何度も優勝しているすごい人だ。ただ、あまりに重い負荷をかけてトレーニングをしすぎたため、脊椎を痛めてしまい、今は日常生活にも苦労しているという。

意志が強く、自分に厳しいのも考えものだ。

ジムには、健康意識を高めるためのさまざまな啓発資料も壁に貼ってある。たとえば、糖分の取り過ぎに注意を促す貼り紙。よく食べる料理やお菓子に含まれる糖分が、角砂糖だと何個分に相当するか記されている。

ショートケーキだと13個、大福餅だと11個……。健康のためにはショートケーキは控え気味にした方がいいということだ。よし、今日のおやつは大福餅にしよう。

自分に厳しくならないように気をつけながらジムに通ったせいか、安曇野で年金生活に入ってから体調は悪くない。

ただ、ジムよりも仕事をやめたことの方が健康にはよかったのかもしれない。

会社員生活、とくに退社前の本社勤務の何年間かは、ストレスに満ちた日々だった。毎日の原稿の締め切りに加え、次から次へと会議がある。ひどい日は、一日に5つもあった。

こうなると、夕方には、その日の朝の最初の会議で何を話し合ったか、ほとんど覚えていない。たしかに、はなから人の話をちゃんと聴く姿勢に欠けていたのは認めざるをえないけれど。

そんな日々が健康にいいわけがない。そのころ愛読していた作家の小説にこんな一節があった。

「なににせよ、人生は厳しいものだ。生きている、というのは健康に良くないような気がしてならない」(東直己著「バーにかかってきた電話——ススキノ探偵シリーズ」)

やっぱり、そうだよな……。

退職後にジム通いを始めたのは、そんなひどい生活から少しは健康を取り戻そうと考えたからだ。同時にジョギングも始めた。そのおかげか、肥満と診断された体重が減り、肥満予備軍にめでたく格下げになった。節々の痛みも消えた。しかし、自分に厳しすぎないように、ジョギングはやめた。ジム通いだって、なんだかんだと理由を見つけてよくさぼる。グータラな性格はあいかわらずだ。

だから、私は「健全な精神は健全な肉体に宿る」という格言には懐疑的だ。だってこれが正しいとしたら、いくらか健全になった私の肉体に宿っているのが、依然としてグータラで不健全な精神なのはどういうわけか、説明がつかない。

調べてみると、やっぱりこの格言はまちがいだとわかった。

古代ローマの詩人の言葉が原典だが、一般に知られているのは誤訳なのだ。正しく訳すと「健全な肉体に健全な精神が宿ることを祈ろう」になるという。そうなるといいなあ、という願望を表している。つまり実際には、肉体と精神の関係はそんなうまい具合にはいかない、という悩ましさの裏返しだ。

万巻の書を読んだり、思索にふけったり、数学の難題を解き続けたりしても、筋肉はつかない。逆に筋トレに励んだからと言って、理性がとぎすまされるわけではない。当たり前のことだ。実際、熱心なスポーツ指導者がパワハラに走ったり、鍛えに鍛えたプロのスポーツ選手たちが違法ギャンブルや麻薬に手を出したりといった話題は枚挙にいとまがない。

肉体と精神の間には、相関関係はあまりなさそうだ。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■筆者が通うジム。紹介しているサイトからの写真
(写真の提供と説明、いずれも筆者)

【編集後記】

上掲、閑人氏の連載随筆は、今号で58回。来年早々には満5年を迎えます。第1回(2021年3月、705号)には「こちらは退屈で死にそうになりたいんだ——」とお書きになった。が、察するに、退屈とは程遠い日々をお送りのようだ。新年は、多事多難のこの5年を振り返ってみます(K)。